

令和 2 年 5 月 21 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03168

研究課題名(和文) 20世紀前半期南アフリカの左翼政治運動とアフリカ人・カラードにかんする研究

研究課題名(英文) Africans, Coloureds and South African Left Political Movements in the First Half of the Twentieth Century

研究代表者

堀内 隆行(Horiuchi, Takayuki)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：90568346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：バントゥー系アフリカ人とカラード(ケープタウン周辺の先住民、解放奴隷、「混血」の人々)の分断は、南アフリカの人種・民族がもっとも大がかりに分割された過程だった。本研究では、これを20世紀前半期の左翼政治運動について検討した。より具体的には、共産党が1928年前後、アフリカ人の民族解放闘争に特化し、1930年代後半、トロツキストの浸透したカラードの組織化を断念する過程を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義の第一は、南アフリカにおいて被支配人種・民族がもっとも大がかりに分割される過程を、体制側でなく左翼政治運動の関与に注目して扱うところである。第二はバンティング、グールなどイギリスとのつながりも強い人物群をとり上げるところである。

第三は、19世紀末の帝国主義期から20世紀後半のアパルトヘイト期への移行を検討しているところである。第四は、現在の政治状況にたいする過去の経緯の影響を探り、(現地の研究者には困難な)ANCによる人種の分断の検討をおこなっているところである。

研究成果の概要(英文)：The division of Bantu Africans and Coloureds (indigenous people, emancipated slaves and the 'mixed' around Cape Town) was in scale the largest process of divide and rule among South African races and ethnic groups. This research explored the problem, highlighting the left political movements in the first half of the twentieth century; the Communist Party of South Africa concentrated its struggle upon the national liberation of Africans around 1928, while in the late 1930s it abandoned organizing Coloureds into whom the Trotskyists infiltrated.

研究分野：南アフリカ史

キーワード：南アフリカ

1. 研究開始当初の背景

本研究ではバントゥー系アフリカ人とカラード(有色人種の総称ではなく、ケープタウン周辺の先住民、解放奴隷、「混血」の人々)の分断を扱った。このテーマが重要なのは、南アフリカにおいて被支配人種・民族がもっとも大がかりに分割された過程だからだった。分断はアパルトヘイトが終わってもなおつづいている。すなわち、政権を獲得した ANC (アフリカ民族会議) は、多文化主義を標榜しながらも実際にはアフリカ人ナショナリストであり、その多数派支配に対してもっとも抵抗してきたのはカラードである。21 世紀に入るとカラードは民主同盟に結集、同盟は西ケープ州の単独与党にして、国政レベルでも野党第一党として ANC への主要な対抗軸を形成している。こうした現状は、アフリカ人とカラードの分断についての歴史的分析をますます必要としているといえた。

カラード・アイデンティティに関するアディカリの研究によれば、分断の起源の一つは、19 世紀末のイギリス帝国による分割統治にある。南アフリカにおいても 19 世紀なかばまで、カラードは有色人種の総称だった。だが世紀末に、相次ぐ鉱産資源の発見、帝国支配の拡大などによってアフリカ人が植民地社会に大量編入されると、人口調査などでケープタウン周辺の「カラード」と「原住民」(アフリカ人)が分割された。またカラード自身も、原住民より白人に近く「文明的」で、政治的権利に値すると主張した、という。しかしアディカリは 19 世紀末を重視する一方で、20 世紀の歴史的変化を等閑視していた。

そこで応募者は、若手研究(B)などにより、20 世紀前半期のカラードの問題に取り組んできた。具体的にはまず、1920、30 年代にイギリス系のリベラル派の歴史家が著したカラードの歴史や、カラード自身による奴隷制廃止 100 周年ページント(1935 年)、歴史教科書(36 年)などを分析し、歴史の語り/記憶とアイデンティティの明確化との関係を探った。次いで、APO (アフリカ政治機構、カラードの政治組織)の機関紙『APO』が、1911~23 年にわたって、議長の娘シシ・グール(1897~1963 年)の優秀さをカラードの「文明化」のモデルとして喧伝したようすをたどり、ジェンダーと人種の交錯を跡づけた。以上の研究は、19 世紀末の分割統治をイギリス系ないしカラード自身がどう深化させていったかを解明するものである。他方で、分割統治の深化から 20 世紀後半のアパルトヘイト期へどのように移行していったかの検討は課題として残された。それを明らかにすることにより、アパルトヘイト後の現在における人種の分断についても理解が深まるのではないかと。

この問題を解く鍵として応募者が思いいたったのが、1920、30 年代の南アフリカでしだいに影響力を増していく左翼の反帝国主義運動だった。とくに、1921 年に結成された南アフリカ共産党はアフリカ人の民族解放闘争に特化し、トロツキスト(共産党によるレットテルというだけでなく、ソ連を追放されたトロツキーと連携したグループ)の浸透したカラードの組織化を断念した。ここで注目したかったのは、直後の 40 年代に共産党がネルソン・マンデラなど ANC の若手活動家と連携したことだった。その意味において、1920、30 年代の共産党/アフリカ人とトロツキスト/カラードの分断は 20 世紀後半の反アパルトヘイト運動、さらには現在の政治状況にも直接つながる問題といえた。しかし、南アフリカの左翼政治運動史はそもそも当事者によって書かれたものがほとんどで、とくに近年は ANC の多数派支配のもと、南アフリカ国内で運動を批判的に検討することは困難さを増している。他方で、イギリスにおけるドゥルウのアカデミックな研究は通史的で、アフリカ人とカラードの分断が主題でもなかった。

2. 研究の目的

本研究は 20 世紀前半期の南アフリカについて、左翼政治運動によるアフリカ人とカラードの分断を探るものだった。左翼政治運動にはトロツキストも含まれるが、研究期間内は時間の制約もあり、より重要かつ、史料へのアクセスも容易な共産党を対象を限定した。共産党についてはイギリス系のアイデンティティに関連づけ業績も発表しており、そのことをふまえながら以下の 3 点に絞り研究を進めた。

- a. 共産党が 1928 年前後、指導者シドニー・バンティングらのもとでアフリカ人の民族解放闘争に特化していく過程の研究。
- b. 同党が 30 年代後半、先述の APO 議長の娘シシ・グールを利用してカラードを組織化しようとするが、やがてそれを断念する過程の研究。
- c. 今日の南アフリカにおける、20 世紀前半期左翼政治運動の集合的記憶についての研究(グールを中心に)。

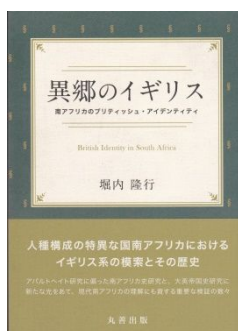
このように研究を進めることにより、19 世紀末の分割統治から反アパルトヘイト運動にいたる具体的経緯が明らかになった。また、それと現在の政治状況の関係についても解明の手がかりが得られた。

3. 研究の方法

本研究は1928年前後、30年代後半の南アフリカ共産党によるアフリカ人とカラードの分断、今日におけるその集合的記憶を明らかにするものだった。このうち1928年前後については、平成30年度にケープタウンの国立図書館分館で機関紙・パンフレットを調査、同時に史料集、回顧録を分析した。1930年代後半については、平成30年度にケープタウンの文書館でマニユスクリプトを調査した。記憶にかんしては、平成30年度に実地検分した。

4. 研究成果

まず、これまでの研究とともに2018年、単著『異郷のイギリス 南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティ』（丸善出版）を刊行した。



『異郷のイギリス』のうち、本研究に係る内容は次の2点。

第一は、1928年前後の南アフリカ共産党とアフリカ人に関するもの（あるいは、アフリカ人とカラードの分断の最初の契機について）である。南アフリカ・ヨハネスブルクにおいて共産党が結成されたのは1921年のことである。初代書記長ビル・アンドリュースはイギリス系労働運動の出身で、同党も当初は白人労働者が中心だった。だが、24年にアフリカーナー（オランダ系）・ナショナリストが政権を獲得し人種差別が進展すると、共産党はバンティング議長、エディ・ルー副議長らのもとで非ヨーロッパ系労働者にもウィングの拡大を図る。さらに、27年にコミンテルンが原住民共和国テーゼを出すと、白人労働者を排除してアフリカ人の民族解放闘争に特化した。しかし、このテーゼはカラードを疎外するものでもあった。30年代初めのケープタウンでは、ソ連を追放されたトロツキーと連携するグループが人種横断的な階級闘争を提唱し、カラード・エリートの支持を得る。本研究では1928年前後、共産党がしだいにアフリカ人の民族解放闘争に特化していく過程を分析し、左翼政治運動におけるアフリカ人とカラードの分断の最初の契機をたどることができた。

第二は、1930年代後半の南アフリカ共産党とカラードに関するもの（あるいは、分断の第二段階について）である。1920年代末にはアフリカ人の民族解放闘争に特化した共産党だが、30年代に入ると社会ファシズム論による「純化」が進み、バンティング、アンドリュースらが（最終的にはルーも）追放された。しかし黨員数も激減したため、党は拠点をケープタウンに移して再建を図る。さらに、35年には方針を大きく転換し、カラードの「人民戦線」である南アフリカ民族解放連盟を組織したが、この議長に選出されたのがシシ・ゲール（1897～1963年）である。先述のとおりゲールはAPO（アフリカ政治機構）議長の娘で、早くも1910、20年代には優秀さを喧伝されていた。また、トロツキストと人間関係的に近く女性参政権運動でも知られ、38年にはケープタウン市会議員に当選している。だが、30年代末になると共産党とトロツキストの対立が再燃、前者はネルソン・マンデラなどANCの若手活動家との連携に活路を見出していく。本研究では30年代後半、共産党がカラードを組織化しようとするが、やがてそれを断念する過程を分析し、左翼政治運動におけるアフリカ人とカラードの分断の第二段階を明らかにすることができた。

また今日の南アフリカにおける、20世紀前半期左翼政治運動の集合的記憶についての研究（シシ・ゲールを中心に）も進めた。アパルトヘイト後の南アフリカでは、官民による歴史の政治的利用が目立っている。この背景のもと、20世紀前半期左翼政治運動の顕彰事業も活発化しているが、とくに顕著なのはゲールのそれ（子ども向け伝記、記念碑、授業プラン、演劇など）である。ゲールは1930年代末、共産党とトロツキストの対立再燃のなかで前者に傾倒したが、その後も後者との関係を継続する。ケープタウン市会議員でありつづけるためには両者の支持が不可欠かつ、そもそも思想的に「純粹」でもなかったからである。しかしこうした二面性ゆえに、ゲールは今日ANCにとっても、ANCに反発するカラードにとっても比較的許容可能な女性として、ケープ社会の統合の役割を再び担い始めている。ゲールの記憶は、アフリカ人とカラードの分断の克服につながるのか。本研究では関連資料の分析のほか、顕彰事業の実地検分をおして、応募者の研究全体の今日的意義を問い直すことができた。

さらに 1940 年代以降、共産党はネルソン・マンデラなど ANC の若手活動家と連携したが、2019 年度にはマンデラの伝記的研究を始めた。

以上、本研究の特色の第一は、南アフリカにおいて被支配人種・民族がもっとも大がかりに分割される過程を、体制側でなく左翼政治運動の関与に注目して扱ったところである。この点は、より一般的な課題としての人種・民族の流動性・構築性を再検討することにつながった。

特色の第二はバンティング、グールなどイギリスとのつながりも強い人物群を取り上げたところである。このことにより、19 世紀末 / 帝国史との接続が具体的に検証された。

特色の第三は、19 世紀末の帝国主義期から 20 世紀後半のアパルトヘイト期への移行を検討しているところである。この検討は南アフリカ史全体にとって不可避の課題でありつづけているが、応募者の研究もそれに、左翼政治運動による人種の分断という重要な側面で寄与するものになった。

特色の第四は、現在の政治状況に対する過去の経緯の影響を探り、(現地の研究者には困難な) ANC による人種の分断の検討をおこなっているところである。この点はとくに、アパルトヘイト後の南アフリカにおける記憶の問題を扱うことによって達成された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Takayuki Horiuchi	4. 巻 12
2. 論文標題 19th and Early 20th Century Policing in the Cape Colony	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies and Essays in History and Archaeology, Faculty of Letters, Kanazawa University	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 堀内隆行	4. 巻 244
2. 論文標題 （書評）磯部裕幸著『アフリカ眠り病とドイツ植民地主義 熱帯医学による感染症制圧の夢と現実』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史と経済	6. 最初と最後の頁 64-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 堀内隆行	4. 巻 11
2. 論文標題 生体認証国家の広がりと限界 20世紀初頭南アフリカ・ケープ植民地の移民法と排華法をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学編	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 堀内隆行	4. 巻 20
2. 論文標題 川分圭子著『ポディントン家とイギリス近代 ロンドン貿易商 1580 - 1941』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 洛北史学	6. 最初と最後の頁 166-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内隆行	4. 巻 264
2. 論文標題 生体認証のグローバル・ヒストリー?	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 93-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 堀内隆行
2. 発表標題 イギリス史・英帝国史・南アフリカ史をつなぐ
3. 学会等名 関西大学経済学会第10・11回研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀内隆行
2. 発表標題 南アフリカ国家を再考する
3. 学会等名 関西大学経済学会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 谷川 稔、川島 昭夫、南 直人、金澤 周作	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 越境する歴史家たちへ	

1. 著者名 堀内隆行	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 異郷のイギリス 南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティ	

1. 著者名 キース・ブレッケンリッジ（堀内隆行訳）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 294
3. 書名 生体認証国家 グローバルな監視政治と南アフリカの近現代	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Takayuki Horiuchi, 'Nelson Mandela and His Era', Historical Approach to the Contemporary World: Textbook for the Kanazawa University's Global Standard Subject (2019), 76-83. 出張講義：石川県立金沢二水高等学校（2017年6月14日） 同：新潟県立直江津中等教育学校（2017年8月23日） 同：富山県立富山南高等学校（2019年12月10日） 教員向けセミナー講師：福井県立鯖江高等学校（2020年1月25日） 教員免許状更新講習：金沢大学（2017年7月30日）</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考